

労働者統制の理論と歴史

ヴィノグラードフ著

副島種典監訳

大月書店

訳 者

副島種典(愛知大学教授)

松原 昭(早稲田大学教授)

岡田 進(東京外国語大学助教授)

瀬戸岡 紘(早稲田大学大学院)

浅尾 仁(愛知大学講師)

岡本 正(大阪経済大学教授)

労働者統制の理論と歴史

1974年5月25日第1刷発行

定価は函に表示
してあります

監訳者◎	副 島 種 典
発行者	小 林 直 衛
印刷所	三晃印刷株式会社
製本所	(株)関山製本社
発行所	株式会社大月書店

東京都文京区本郷 2-11-9

電話 営業 (813) 4651

編集 (814) 2931

振替 東京 16387

落丁・乱丁本はお取替いたします

В. А. Виноградов
Ленинские идеи рабочего контроля
в действии
Издательство «Наука»
Москва 1969

1974 by Otsuki Shoten Publishers, Tokyo
From Russian translated
by
T. Soejima (chief), A. Matsubara, S. Okada,
H. Setooka, H. Asao, T. Okamoto
Printed in Japan

凡 例

I 凡 例

- 一 本書は、ソ連邦科学アカデミー准会員ヴェ・ア・ヴィノグラードフの著書『実行に移された労働者統制にかんするレーニンの思想』（「ナウカ」出版所、モスクワ、一九六九年）（В. А. Виноградов 《Ленинские идеи рабочего контроля в действии》，Издательство «Наука》，Москва, 1969）の全訳である。
- 一 原書には冒頭に著者の「はしがき」がついているが、その内容は多分に「日本語版への序文」と重複しているため、本訳書ではこれを割愛した。
- 一 本訳書では、見出しは訳者の責任で原書の見出しを簡略化した。なお、原書の見出しは、「原書目次」として九ページに一括してかかげておいた。
- 一 本書の原訳には、松原昭（第一章）、岡田進（第二章）、瀬戸岡紘（第三章）、浅尾仁（第四章）、岡本正（第五章、日本語版への序文、序文）があたり、全体を副島種典が校閲した。
- 一 原文がイタリック体のところには訳文では傍点を付し、イタリック体で隔字体のところには白丸を付した。
- 一 原書注および訳者注は、本文該当箇所*印を付し、ともに巻末の注解にまとめた。ただし訳者注は、とくに「」にかこんで、原書注と区別しておいた。
- 一 レーニンの著作からの引用箇所は、大月書店刊『レーニン全集』、および『レーニン10巻選集』によってしめた。本訳書において、たんに『全集』、『選集』とあるのは、右のものをさしている。
- 一 巻末の文献は、原書にかかげられているものから、とくに必要とおもわれるもののみを抽出したものである。

一 地名、人名などは、できるだけ原地読みに近いように表記した。ただし、慣用的なものについては、この原則に従わなかった。

日本語版への序文

世界最初の社会主義国であるソ連邦の政治的、社会・経済的、文化的発展のすべての側面は、世界諸国民のますます大きな注目を集めている。資本主義国と発展途上国の勤労者はひとしく、ソ連邦の歴史と現状——十月大革命から今日までソヴェト国民がおってきた英雄的な道のすべて——に関心をよせている。ソヴェトの経験が他の諸国民を引きつけるのは、なによりもまず、経済のなかに多様なウクライドをもち、地方地方で工業と文化の発展水準がちがい、民族的特性やその他の特性に大きな差異のあった巨大な国で、社会主義的改造が遂行されたということによる。この経験は社会主義の偉大な生命力をものがたっている。新しい生活の建設が始められたのは、第一次世界大戦で疲弊し、国内戦と帝国主義的干渉によって前例のないほど痛めつけられた国においてであった。それにもかかわらず、かつてない短期間にソヴェト・ロシアは廃墟から立ちあがり、後進性から進歩の頂上へ巨大な歩みをとげた。このことが可能になったのは、社会主義的な発展の道の優越性をたくみに利用し、しかもこの道を、歴史上はじめて搾取から解放された労働の権利を獲得した人民の熱情と掛けあわせたおかげにはかならない。そのためソヴェトの経験はすべ

て、経済における初期の社会主義的改造も、国民経済の計画的管理の始原も、民族問題の解決も、国の工業化も、農業の集団化も、初期の数次の五カ年計画も、ヒトラー・ドイッにたいする大祖国戦争における歴史的勝利も、社会主義国家の、その民主主義的諸制度の、また経済、科学および文化のいっそうの発展も——これらは周知のことで、何度も全人類を感嘆させたところであるが——、すべてが注目を引き、模範となり、そしてマルクス・レーニン主義思想の勝利をものごとになっているのである。

ソ連邦における社会主義建設の歴史の輝かしいページの一つは、生産にたいする労働者統制を確立し発展させた多面的な、豊富な経験であるが、これは一国だけでなく国際的な意義をもつものである。この経験が教えているように、どの労働者政府も、経済での改造は、なによりもまず、生産にたいする統制を確立し、統制の責任を労働者に、労働組合の機関に負わせ、統制と記録の発展のために彼らの創意を全力をあげて奨励し支援することから始めなければならない。

著書『実行に移された労働者統制にかんするレーニンの思想』では、生産にたいする労働者統制にかんするヴェ・イ・レーニンの学説の発展、ソヴェト・ロシアと諸外国における労働者統制の実行が研究されている。本書の基本的な目的は、社会主義諸国家における労働者統制の経験を一般化し、発達した資本主義諸国での経済にたいする労働者統制をめざす闘争の意義、勤労者の反独占運動におけるその地位をしめすことである。

本稿は、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命から社会主義革命への成長転化の時期に、レーニンの指導のもとにボリシェヴィキ党*がおこなった、生産にたいする労働者統制のための闘争を考察することから、始められている。本書では、革命のさまざまな段階での労働者統制の実践、それが、経済的崩壊との闘争、ブルジョアジーの経済的支配の制限、ロシアのプロレタリアートの権力奪取の準備のためにもった

意義がしめされている。

十月社会主義革命の勝利のあと、レーニンの布告にもとづいておこなわれた生産にたいする労働者統制のための諸機関の多面的な活動、新しい生活の建設における勤労者の創意の発展、ブルジョアジーのサボタージュとの闘争、産業の社会主義的国有化の準備が、大量の文書資料にもとづいて解明されている。

本稿の中心的位置を占めるのは、労働者統制にかんするレーニンの学説と生産にたいする労働者統制のソヴェト的経験とがもつ国際的意義の研究である。本書は、十月大革命の影響のもとに、ハンガリー、オーストリア、ドイツ、ポーランド、イタリアその他のヨーロッパ諸国で、一九一八—一九一九年の革命的諸事件の時期に展開された、労働者統制をめざす闘争の全体像を提供している。また本書では、一九四四—一九四九年のヨーロッパの人民民主主義諸国における労働者統制が分析され、これらの国の社会主義への移行の歴史的、民族的、経済的諸条件と関連するその特殊性が強調されている。本書の最後の部分では、フランス、イタリア、イギリス、ドイツ連邦共和国、オーストリアの実例で、共産党の指導のもとに生産にたいする民主的統制をめざすプロレタリアートの闘争の課題と形態が考察されている。

諸国家間および諸国民間の関係では、経済的要因とならんで、文化的な結びつき、精神的価値物の交換が重要な意義をもっている。ソヴェト人は大きな注意と関心をもって、現代日本の発展を見まもっている。ますます拡大する経済的結びつき、学術上の接触、文化・芸術活動家の往来、書物の翻訳、旅行その他多くのことは、このことに役だっている。近年日本では、科学と技術の種々の分野のソヴェト人著者の書物が多数翻訳されている。この重要な仕事には、大月書店その他の日本の進歩的な機関が大いに貢献している。

著書『実行に移された労働者統制にかんするレーニンの思想』が日本語に翻訳されることは、ソヴェト

社会主義国家の発展の歴史に日本の進歩的な読者が大きな関心をもっていることの新しい証拠である。

一九七三年九月二四日

ヴェ・ヴィノグラードフ

目 次

原書目次	九
序 文	三
第一章 十月革命への移行期のロシアにおける労働者統制	三
一 労働者統制をめざす闘争の第一段階（一九一七年三―四月）	三
二 四月の党協議会以後の運動の発展（一九一七年五―六月）	四
三 階級矛盾の激化のなかでの労働者統制（一九一七年七―八月）	五
四 武装蜂起の準備期における労働者統制（一九一七年九―一〇月）	七
第二章 社会主義への第一歩としての労働者統制	九
一 レーニンの労働者統制令とその意義	九
二 ソヴェト権力の最初期の労働者統制と生産の組織化	一六
三 労働者統制から労働者管理へ	一四〇

第三章	十月革命後のヨーロッパ諸国における労働者統制の運動	一五八
第四章	東欧の人民民主主義諸国における労働者統制	一九三
一	解放期における労働者統制	一九六
二	人民権力下での労働者統制	二〇六
第五章	現代の資本主義諸国における生産管理の民主化と労働者の参加	二三〇
一	戦後の初期における経済にたいする民主的統制をめざす闘争	二三〇
二	生産管理への参加をめざす近年の運動	二四六
注	解	二七五
解	説	二九六
参考文献		一

原書目次

第一章 ロシアにおけるブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化の時期における生産にたいする労働者統制

一 生産にたいする労働者統制をめざすボリシエヴィキ党の闘争の第一段階（一九一七年三月—四月）

二 四月協議会以後の労働者統制をめざす運動の発展（一九一七年五月—六月）

三 階級矛盾の激化の状況下での労働者統制をめざす闘争（一九一七年七月—八月）

四 武装蜂起の準備期における労働者統制（一九一七年九月—十月）

第二章 ソヴェト国における生産にたいする労働者統制——社会主義への第一歩

一 労働者統制についてのレーニンの布告とその意義

二 ソヴェト権力の最初の数ヵ月における労働者統制と生産の組織化

三 労働者統制から産業の労働者管理へ

第三章 十月革命直後のヨーロッパの革命的プロレタリアートの戦闘的スローガンとしての労働者統制

第四章 一九四四—一九四九年の人民民主主義諸国における生産にたいする労働者統制の諸特性

一 ファシスト占領からの解放期における労働者統制の出現とその役割

二 人民権力下での労働者統制の形態と方法

第五章 生産管理の民主化をめざす現代のプロレタリアートの運動における、レーニンの労働者統制の思想の具現

一 戦後の初期における経済にたいする民主的統制をめざす資本主義諸国の労働者階級の闘争

二 現代の状況のもとでの、生産管理への参加をめざす発達した資本主義諸国の勤労者の運動

労働者統制の理論と歴史

「……およそどんな社会主義政府、労働者政府もとらなければならない最初の基本的な歩みは、労働者統制でなければならない。」

ヴェ・イ・レーニン

（労働者・農民・カザック・赤軍代表ソヴェト第六回臨時全ロシア大会での、「革命一周年についての演説」から）

序 文

ヴェ・イ・レーニンは、帝国主義の時代における社会主義革命のマルクス主義理論を展開することによって、ボリシエヴィキ党に、またロシアのプロレタリアートに、社会の社会＝経済生活全体を社会主義の原則のうえに改造することの科学的綱領をあたえた。レーニンの綱領のおもな内容をなしたのは、地主所有地の没収と国内のすべての土地の国有化、生産と流通の部面での労働者統制、銀行とシンジケートの国有化、勤労者の利益のための計画経済の組織化であった。

これは、資本主義的搾取からの、封建制の遺物からの解放にかんする、またあらゆる物質的および精神的価値物が人民の財産になる新しい社会の創造にかんする、勤労大衆の願望を体现した綱領であった。こうして、社会主義の偉大な諸原則が、実践上の諸施策の綱領のうちに、労働者と貧農の広範な大衆にとって明白で近しい諸要求の体系のうちに、はじめて具体的に表現されたのである。これは、現実の客観的分析にもとづいた深遠な科学的綱領であった。

ヴェ・イ・レーニンは、一九一六年に執筆した労作『資本主義の最高の段階としての帝国主義』『帝国